

# 1996年広州・香港の旅

組原 洋

## 1

今回、広州に行くことになったのは、沖縄法政学会を通してもちこまれた話に乗せてもらったものである。初めてこの話を聞いてすぐに参加を決意した。

その後、手続等はどんどん進められて、同行するのは沖縄大学からは新城将孝氏、琉球大学からは垣花豊順・安次富哲雄両氏と決まった。沖縄国際大学からは今回は参加者なしのことだった。こちら側の通訳として、沖縄大学卒業生で、現在、琉球大学大学院生として、安次富氏のところで民法を勉強している李穂生さんが一緒に行くということだった。96年5月30日付で広州市人民代表政府外事弁公室からの招待状が届いたことは知らされたが、私個人としては、ただ旅行できればというだけのことで、どういう事情で話が持ち込まれ、どんなことが行われるのか、余り関心はなかった。出発のちょっと前に、同行の4人が集まってミーティングをした。そのときの話では、今回、沖縄国際大学が参加しないこともあり、具体的な交流締結はしないということで意見は一致した。先方からいろいろ話はあるだろうが、きくだけにしようということである。沖縄法政学会は96年度は沖縄国際大学が当番校で、会長も同大学の西原森茂氏である。会長抜きでは話は決められないだろう。ミーティングのとき簡単な日程はあった。先方から送られてきたものようである。幾つかの大学の法学関係者と話すことは分かったが、それ以上のことはよく分からなかった。

こうして、出発日がどんどん近づいて、私は新城氏と20日（木曜日）の午前中出発ということになっていた。ところが、17日になって、20日の切符がとれないということで、結局出発は19日の午前中ということになったのである。李さんは18日夜、最初に香港に発ち、続いて我々が香港に行き、最後に垣花・安次富両氏が20日夜香港に到着し、翌21日の朝5人でそろって広州に行くことに決まった。

こうして私は新城氏と6月19日（水曜日）午前11時25分発の中華航空121便で那覇を発った。出発してすぐに、隣の席の新城氏が大きな声でわめいた。背広を忘れたというのだ。衣類を入れたバッグを忘れたようである。公式訪問だから背広は必要である。香港で買えばいいだろう。安いそうだからちょうどいい。1日早くなって幸いだった。

台北で乗り換え、中華航空609便で香港に着いた。台北―香港間が1時間ちょっと。台北も香港も日本より1時間遅れ。入国手続きを済ませて出ると李さんが出迎えてくれた。まだ3時前だったと思う。タクシーで李さんの事務所に行く。事務所は、九龍から北西方向のツェンワンというところにあるのだが、途中飛行機の中で、ガイドブックでこの場所を確かめて、ここが香港の新界であることを発見した。それで俄然興味を感じ、出来れば香港の新界も回ってみたいと思った。タクシーの中で今後の予定について話したとき、この私の希望が通り、広州から帰ってきてから新界を回るということに決まった。タクシー代は、初乗りが14香港ドルで、ツェンワンまで95.60香港ドルだった。事務所のすぐそばに銀行があり、そこで私は200米ドル

両替した。両替レートは1米ドルが7.715香港ドルである。手数料は一律（50香港ドル）で、しかし高いので、たくさんかえたほうが良いといわれたが、さしあたってこれで足りる。

事務所というのは実質的にアパートで、ビルの7階（階はイギリス式に数える）。3部屋に狭いバス・トイレと台所。そこでしばらく休んだ。それから出て、地下鉄駅に行く。事務所からすぐそばであり、ツェンワンは終点である。地下鉄の回数券（70香港ドル）を買って、途中乗り換えて、香港島のコーズウェイベイに行く。地上は松坂屋等のデパートがあり繁華街になっている。ここで、高橋広子さんという人にあつた。名刺には、香港沖繩県人会長という肩書きがついている。この人とタイムスクエアというビルに行って、その中の大きなレストランで一緒に食事した。珍しいものを注文してくれた。周囲がうるさくて、高橋さんの話が十分聞き取れなかったので、周囲の円卓を観察していた。家族連れとか友人連れとか非常ににぎやかである。食後、安い衣料品店で新城氏は、半パンとTシャツを買った。

## 2

翌20日は木曜日だが、香港では祭日になっているそうだった。事務所を出て右隣が軽食店で、そこで肉団子の入った麺を食べた。

地下鉄のチョンサーワン（長沙灣）、ライチコ（荔枝角）、サムスイポー（深水埗）と行ったりきたりしながら回って、背広さがし。時間が早過ぎてまだどこも開いてない。時折強い雨が降る。私は以前韓国で買った3段折り畳み傘を持ってきていたが、それと同じ型のがあちこちで売られていて、新城氏と李さんはそれぞれ同じ型の黒いのを買った。休みで、人が少ない。地下鉄でチムサチュイ（尖沙咀）に出る。あちこち店を見て回る。タクシーで商店が集まった大きなビルにも行った。やはり人が少ない。昼前になって小さな店で、やっと適当な背広が見つかる。新城氏の買ったのは上下でちょうど1万円ほどのようであるが、高いのも安いのもあるので値段の程度はよく分からない。同じ店で李さんも背広の上を買う。

昼食後、ちょっと本屋を見てから、スターフェリーで香港島にわたり、ケーブルカーで山頂に行く。香港島側のスターフェリー乗り場周辺に出稼ぎのフィリピン人が大勢いて、ピクニックをやっているみたい。フェリーを降りたあたりからズラッと紙とか敷いて座っていて、びっくりするに足る人数である。女性の方が多い。夫婦共稼ぎ家庭でお手伝いさん（アマ）として雇われることが一般化しているのだという。山頂でかなり休んでから降りて、フェリーで九龍に戻って、少しウインドウショッピングをしてからツェンワンに戻る。駅のそばにゼリーショップのようなものがあり、そこで亀苓膏という漢方薬のゼリーを食べる。うまいとはいいいかねるが、食べられなくはない。どういう効果があるのか知らないが、李さんの説明から察するに、不老長寿のようなものでしょう。

事務所であつた休んでから、左隣のレストランで食事する。もちろん中華料理だが、お茶は大きなポットに入れて持ってきてくれて、飲みおわって蓋を開けた状態にしておくとお湯を入れ直してくれる。何杯おかわりしてもいい。それから、茶碗や箸、さじをお湯で洗うこともたいていの人がしている。食べてから、バスで空港に行き、垣花、安次富氏を迎える。両氏はホテルまで送ってから、李さんの事務所に戻る。

21日（金曜日）、6時40分頃タクシーで出て、垣花氏らの泊まっているホテルで一緒に朝食後、タクシーで九龍駅に行く。九龍で香港出国手続きを済ませ、9時発（実際には9時25分発）の直行列車で広州に向かう。

国境を越えたところで、中国的特色のある社会主義建設という大きな看板が出てきて、ああ中国に入ったのだなあ。途中、あちこちで建物を建設しているのが印象に残った。様子を見ると、手作業が多く、設計通り建つのだろうかと思わせるような感じ。実際、垣花氏が、ゆがんでいるといていた。それから、テレビの大きな衛星アンテナがあちこちにあって、これも目立つ。

広州には12時に着いた。入国手続きも、税関も問題なく終わる。出迎えてくれたのは、劉少卿さんという、広州市人民対外友好協会副秘書長の女性、汪洋さんという弁護士、それに羊昭紅さんという通訳の女性。羊さんからは後で名刺をもらったが、広州大学外語系講師という肩書きになっている。

広州駅前に立ったときは、感慨があった。私は、1987年3月に、香港から鉄道で中国に入った。今回のように直通列車に乗らず、国境でいったん降りて、出国、入国手続きをした。中国側はシンセンである。大勢の人が列を作っていた。どのようにしてかもう忘れたが、とにかく切符を買って、広州までの直行列車に乗った。座席が大きい感じがした。広州駅について、駅の外に出たときの、めまいのような感覚は忘れられない。広さと駅周辺の人々の多さには本当にたまげた。人が昆虫のように見えた。今回は、別の出口から出たのだが、特に広いという感じがしなかった。現在、駅前に高架の道路が走っているが、これはこの前来たときはなかったのではないか。視界が狭くなったような気がする。この前来たときも広州にはもうタクシーもあったが、私は声をかけてきたお兄さんのオートバイの後ろに乗せてもらって広州賓館というホテルまで乗せていってもらったのである。代金はこちらで適当に出したら、それで満足のようなだった。今回は、ワゴン車が待っていてこれで宿泊ホテルの白天鵝賓館に行く。途中、広州賓館のそばも通ったはずだが見当たらなかった。とにかく、あっちでもこっちでも建物を建設中のようなのである。更地になっている大きな土地も何ヶ所もあった。

我々の泊まるホテルは5つ星である。すごくきれい、というか、日本のホテルと別に変わらない。新城氏と同室に落ち着いて荷物を置いてから、ホテルのレストランで昼食しながら日程調整をする。我々は、広州市法学会との交流のほか、広州市の法学系の大学を訪問することを主要な目的としてきたのだが、先方では、広州市法学会全体で我々を招待したのだからということで、個別の大学として会うことには乗り気でない様子で、日程も組まれていなかった。しかし、各大学にこちらの大学案内等をせっかく持ってきたのである。ぜひ話をしたい。そういうことで、李さんや、通訳の方等が努力してくれた結果、早速この日の夕方に広州大学の先生がこのホテルに来てくれることとなった。

昼食の際、まずお茶には面食らった。ここではお茶は、茶わんにお湯を入れて、そこにお茶の葉を入れ、蓋をして、ちょっとしてから、蓋をはずすのではなく、ずらすようにして飲むのだが、慣れないと飲みにくいし、ガブ飲みはできない。それから、飲み物は、何種類かから選んだが、牛乳のような白いココナツの飲み物が特産だということで、おいしかった。料理は、いったん全部を皆に見せてから、あっちの方で分けて置いてくれた。料理の種類は多いが、そ

んなに量は多いと思えなかった。たばこを吸う人はあまりいなかった。食事中も、劉さんなどはしょっちゅう携帯電話をかけてはなして、しかも、それを皆に隠さないばかりか、むしろ誇らしげである。このような携帯電話は一般市民は持っていない。公安等の特殊な連絡用のものだと思われる。劉さんなど、とても貫禄があって、偉い人のようだ。何があってもあわてないし、ゆうゆうたるものである。

食後、部屋でちょっと休んでから、4時頃から、広州大学の先生2人と李さんの部屋で会った。劉興桂、李力両氏である。両氏とも広州大学の副教授であるが、中国では、そういうことより主任、副主任という身分が重要なメルクマールであると言われている。つまりそれが、「幹部」であることを示しているからである。西澤治彦氏によれば、「大学では、学長をはじめ系主任（学部長）および党委員会書記や委員などは幹部だが、一般の教授は幹部ではない（曾士才・西澤治彦・瀬川昌久編著「アジア読本中国」（河出書房新社・1995年）。李力氏が法律系主任、劉氏が同副主任である。実は、2人の名刺をもらったがどちらがどちらか分からない。1人は男性、1人は女性なのだが私にはどちらか判断できない。その後の経験では、女性は黒でない活字やマークのついた名刺を使っている人が多いように思うので、たぶん李力氏が女性だと思う。羊さんに聞いたら、名前を聞いて男性か女性か大体分かるかといっていた。

あいさつの後、ロビーに降りて、喫茶店で話した。羊さんと李穂生さん、2人通訳がいるので、2つに分かれ、私と垣花氏は、羊さんの通訳で、女性の先生と話した。私は主に、弁護士制度のことを聞いた。中国では弁護士のことを律師というが、その地位はそんなに高くないと聞いている。それは結局、体制の支配の道具にすぎないからではないか。いろいろ質問したが、日本とはかなり違うのではないかと感じた。先方は、日本の法曹制度とか、裁判制度をぜんぜん知らないようである。一所懸命質問してきたので垣花氏と一緒に答えた。卒業生の進路の話もあった。一番印象に残るのは、法社会学は大学の講義の中にはないということである。大学院ではあるようだ。ブラジルと似ている。つまり、法を客観的に1つの制度として研究するみたいなスタンスでの研究は盛んではないのだろう。それから、国を相手にしての訴訟、つまり行政訴訟はそんなにないといっていた。そういうのは中国ではあまりしません、と。中国法の研究は日本では進んできているので、いずれ話した内容について本で調べてみるつもりだ。お二人とも若くて、熱心だった。すごく充実した話し合いだった。

ふと気づくともう夕方になっていて、続いて歓迎パーティに出席した。最初、広州市人民代表大会常務委員会副主任の人とか、広州市人民対外友好協会副会長とか（いずれもおばあさん）と挨拶してから隣の部屋でパーティが始まった。世界各国からお客さんが招待されてきていて、日本では我々のほか、福岡市が広州市と姉妹都市だそうで来ているのだそうで、RKB毎日放送の大川信夫報道部副部長ら3人が取材しに来ていた。パーティの後、洗濯して寝た。

#### 4

22日（土曜日）、朝寝過ごしてしまった。7時半に朝食にしましょうと羊さんと約束してあったのだが、40分頃になって新城氏にたたき起こされる。ああ、社会主義国は大変だ。食事にも通訳が出てくるのは、かつてのモンゴルを思い起こさせた。82年当時のモンゴルの通訳は監視も兼ねていた。下におりて、朝食。バイキング形式だが、お粥があるのでそれにした。その後、洗面を済ませてから、ミニバスに乗ってレイシ狩りに出かける。

一行は、公安の車が先頭になり、それから何台かベンツが並び、そしてミニバス2台、その後にも何台か車が続く。わっ、すごい。邪魔があるとサイレンを鳴らして排除する。やがて高速道路に入ったが、ここでも料金所フリーパス。1時間足らずで高速道路の終わりまで来て（その先は建設中）、あと泥道になる。雨が降っている。やがて細い道を行くとレイシ畑に出た。そこで、木になっているレイシをつまみ食いする。うまいが、あっさりしすぎて、特徴がない。福岡市からきた姉妹と友達になった。何歳なのか見当がつかない。日本人だとは思わなかった。あっちも同じことを言っていた。

かなりいてから、広州市の東隣にある増城市の増城賓館というホテルに行く。ここでお茶を飲んで休憩。そして、同じホテル内で、昼食会。歓迎のあいさつが続き、外国からのお客さんが紹介され、カメラやビデオを盛んにとっていた。食事は立派でおいしかったが、レイシの天ぷらはいただけない。生のままのほうがずっとおいしい。この時も隣に福岡の方々が座ったが、表千家教授のおじさんとかがいて、ああなるほどと。

食後またバスに乗って経済特区見学に行く。だんだん雨がひどくなってきた。見学といっても、管理本部みたいなところでビデオを見て説明を聞いただけである。確かにバカでかいビルが建ち並んでいる。説明の後、今度は、そばの広州保税区管理委員会に行く。ここでも副主任の説明を聞いただけ。土曜日ということもあるかもしれない。

その間にも雨はますますひどくなって、いよいよ帰りはじめたらすぐに道がつかえて動けなくなる。道は一部浸水している。ここは、道が中央部の車道のほか、多分自転車やバイク用の道が両側についている。そこを通りながら進んでいく。並ぶようにして、工場から労働者たちが歩いたり、自転車に乗ったり、バイクに乗ったりしながら帰っていく。そもそも帰れないんじゃないかと思っていたら、公安の車は進むべき道を作っていく、やがて高速道路に乗った。予定からは大幅に遅れてだが、とにかく6時50分に帰ってきた。強い意志を感じて、驚嘆した。

当初の予定では、7時半から観劇ということだった。普通に中華料理を食べるととても間に合わない。どうするのだろうか興味があった。弁当でも食べるのかと。そんなことはなく、普通に食事が始まった。本当の始まりは8時15分からとかで、8時までゆっくり食事したのである。それから、公安の車がサイレンを鳴らしながら先導して、8時20分頃に着いた。歌舞劇は始まっていた。いろんな踊りがあったが、終わり近くになって日本舞踊のようなものがあったのにはびっくりした。友好ということを意識しているようである。踊りは9時半頃までであった。帰日もサイレン鳴らして騒々しく帰る。何だなんだ、という顔を見ながら車に乗っているのはきつい。ホテルに帰ったらすぐに寝た。

## 5

23日（日曜日）、朝6時に起きて、散歩に出る。部屋を出たところでちょうど安次富氏と一緒にになった。昨夜寝る前にガイドブックの地図を見たらホテルのそばに清平自由市場というのが出ていた。いわく、「食都・広州の胃袋を満たす源といえるのがここだ。アヘン戦争後に英仏両国が租界とした沙面の北側、全長1kmほどの通りには2,000以上の店舗・屋台が店開きし、海の幸から山の幸まで、肉、魚介、野菜、果物、加工品など、とにかく食べられるものならなんでも売っている。イヌとかネコがかわいそうとか、ヘビやネズミは気持ち悪いという人にはおすすめできない。ここを訪れる人は観光客を含めて1日6万人といわれる。」（昭文社のエ

リアガイド109) ここだ、ここだと思った。なるほど、そうすると我々が泊まっているこのホテルはその沙面にある可能性が高い。安次富氏もそこに行きたいのだそうだ。地図ではホテルの北に向かえばすぐのようだが、いつも車で出入りしている道だと直接そっちに行くことができず、かなり遠回りになった。でもまあ、運動している老人を見たり、とにかく自分で歩けるのがうれしかった。通りに出ての一番の印象は、自転車が減って、その分バイクや車が増えたことである。道を渡るのが一苦勞である。やがて、めざす市場に着いた。日曜日のせいか、それとも早すぎるのか、人はそんなにいない。売っているもので一番印象に残ったのはカメである。大きいカメがたくさん売られていた。後で安次富氏が言うには、スッポンもあったそうだ。犬も売られていた。スピッツみたいな小さい犬。ブタももちろんいた。何の虫か、虫もあった。時間がないので適当に引き上げる。帰りに最短距離と思われる道で行くと、ホテルの裏口に着いた。

朝食後、この日はまず、南越王の墓とかに行く。市内である。最初ビデオを見て(10年ぐらい前のもの)、それから回ったが、どういうものかよく分からなかった。分かったのは、よっぽど偶然がなければ発見されなかったでしょうというので、南越王の墓というのは密かに隠されてきたということである。南越というのはベトナムのことなのだろうか。

その後、今度は陳氏祠(陳氏書院)に行く。これはガイドブックにも載っている。1890年に建てられた、陳氏という個人が先祖をまつるため建てたものだそうで、今は広東民間工芸館になっている。彫刻がたくさんあるのだが、ピンとくるものはなかった。お土産売り場では、ミルクの神様らしい彫刻があったが、買おうという気になるものはなかった。表情がピンとこない。この建物は細い路地の奥にあるがそこにサイレン鳴らしながら我が物顔に入るのは抵抗があった。何が民間だと言いたくなる。

ホテルに戻って、昼食。その後いよいよハーリーで、我々1人1人に招待状が配られてからバスで出発する。ホテルも川沿いなので、すぐそばである。着いて、来賓席に招じ入れられる。招待状を見ると、席は1から8までに分かれ、2と3の間に主席台がある。我々は4の席である。入るとき招待状をチェックされ、袋をもらった。中には、蒸留水2本、サトウキビの汁のジュース1缶、ハーリーの記事が載っている新聞、ビニールのかっぱと野球帽等である。よく考えられていると思う。広州滞在中、毎日のように雨が降った。長時間続くのではなく、断続的に降る。雨具は必要である。しかし、湿気は高いのに暑いので、喉も渇くのである。そこで飲み物もこんなに必要になるわけである。最初は何でこんなに配るのかとたまげたが、終わってみると、ジュースはもちろん、水も1本半飲んだ。これらは誰にでも配られているわけではなく、つまり特権の一つである。招待状をもらったときはその立派なことに驚き、形のことにこんなに金を使ってもったいないなと思ったのだが、これは形ではなかった。実際、福岡の女性がトイレに立って帰ってくると、招待状がないため公安のチェックで引っかかって、入るのが大変だったと言っていた。招待状をなくしてしまったら多分面倒なことになる。あっ、これも幹部がついてれば大丈夫なのかもね。隣の3の席が幹部の席のようだが、皆さん顔見知りの方である。席順は、これもモンゴルのナーダム(競馬の大会)を思い起こさせた。私がモンゴルに行ったときちょうどナーダムで、楕円形の競技場に行くと、外国人の席がやっぱり幹部の隣だった。一般の人が自分の席がわからなくて右往左往し、エライ人の席に紛れ込んで警官に追っ払われていたのが記憶に残る。ここでは、川の向かい岸が一般の人のようだった。隣の席に座った福岡のおじさんが望遠鏡を持っていたので借りて見てみたが、あっち側にはこっ

ち側のような席はなかった。

ハーリーそのものについては、とにかく舟が大きい。デモンストレーションの舟は2列になって全部で50人ぐらいで漕いでいる。実際の競漕のときは、この半分ぐらいの大きさの舟だったが、それでも大きい感じがした。チーム名を書いた旗に「上海村」というのがあったが、福岡の方々担当の男性の通訳さんの話によれば、「村」というのは日本でいう村とは違い、地方という意味だそうである。「南方」というのがあって、これに広州が含まれるのかもしれない。それから、海ではなく川でやるので、ちょっと感じが違う。後で同行の皆さんに聞いたところでも同意見だった。ピンと来ないねえ、と。でもまあ、似てるといえば似てる。こっちのほうから沖縄にもきたんでしょ。途中隣のおじさんが福岡市民の代表ということでRKBのインタビューを受け、ついでに私も沖縄から来たということでインタビューを受けた。中国にきて日本のテレビ局に映されるとは思わなかった。

夕方ホテルに戻ってからフロントで20米ドル両替した。162.30元きた。中国人民銀行紙幣。それまで、中国の金をぜんぜん持っていなかった。お金を手にしたらすごくうれしくなって、ホテルの売店をのぞいてみた。しかし、買いたいものはないなあ。

夜はまたパーティで、広州市の主催である。バスで、商工会議所みたいなところに連れて行かれる。隣にマクドナルドがある。パーティ会場ではあらかじめ席が決めてあったようだが、日本人の皆さんは皆無視して一番端っこに陣取った。広州市常務副市長陳開枝氏の名刺が全員に配られ、挨拶があり、さらに例によって外国からのお客さんの紹介があったが、皆さんもうあまり聞いてないみたい。これで皆一緒の公式行事は終わりだということで、終わった、終わったという解放感のほうが強かった。時々広州のエライ人が回ってきて乾杯した。それで私も、隣の円卓に集まっている福岡の皆さんにはお世話になったので挨拶したほうがよかろうと思い、沖縄からの団長の垣花氏にもついてきてもらって、一緒に挨拶した。お返しに、あちらからも挨拶に来た。やがて散会になり、記念撮影とかを派手にやってからバスに乗り込んだ。ホテルに戻ってから、李さんを除く沖縄からの4人で散歩した。朝歩いた市場周辺をもう一度歩いた。もう結構遅くなっていて、終わりに近かったが、やっているところもあった。

## 6

24日(月曜日)、ちょっと遅くなったが、朝1人で散歩した。大きな通りで荷物を積んだ自転車が倒れていて、元どおりにしろと自転車の主が倒れる原因を作った男をつついていて。市場の向こうまで歩いていって見た。第23中学というのがあり、そこらあたりで、月曜日の朝の人の動きを観察した。

ホテルに戻って朝食後、10時から、ホテル内の会議室で広州市法学会との懇談会が開かれた。先方の出席者は3人でいずれも弁護士である。1人が、広州駅に着いたとき出迎えてくれた汪氏、中心になって一番たくさん話したのが陳廣訓氏で、両氏はともに広州市東方律師事務所というところで働いているようである。もう1人は金久隆氏。当方は沖縄法政学会と、琉大、沖大、沖国大の年報や案内等を差し上げ、先方からは、広州市法学会の代表大会記録や、「市場与法」(市場と法)という雑誌、それに、中国法学会のバッジをもらった。雑誌は、汪氏が編集しているものである。記念撮影の後、意見交換に入り、まず垣花、安次富氏らが広州と沖縄との類似点等を挙げて、交流は意味があるのではないかと述べられた。私も意見を述べ、やは

り広州と沖縄という組み合わせに興味があるが、それは、北京と東京ではなく広州と沖縄なのはなぜか、といった意味での興味を含むこと、それから、先方はすべて弁護士であるが、私も弁護士資格を持っており、できれば実務と関連する研究交流もやりたいと述べた。先方はまず、沖縄法政学会の日本国内での位置づけに興味があるようだったが、実際、考えてみると、沖縄法政学会と類比できるようなものが日本の各都道府県にあるかという点、疑問ではなからうか。日本の場合、学会といえば基本的には全国規模のものが多いのではないかと。ブロックを組むというだけなら、例えば九州法学会もあるが。中国の場合階層構造になっているようである。そうすると、上は中国法学会で統一されるということなのか。先方がおっしゃるには、「法学というのは純粋の学術関係ではありません」と。学者（研究者）のほか法律を実行する現場を含んでいるのです、と。で、具体的な交流内容に関する話しを早くもやりはじめた。メモによると、1つは、交互訪問・大学で具体的なテーマを出して会議等・裁判所見学といった交流、2つめに資料提供、3つめに、私の意見とも関連するがとのことで、実務援助を挙げ、例えば工場を作るときどんな法律上の問題があるか等教えあうとかを例として挙げられた。3つめにはびっくりした。沖縄法政学会は、少なくとも今までのところ、純粋研究団体で、実務というものもその枠内でのことである。実際に工場を作ったりするのに関与したりすることは考えにくい。沖縄側がそういう趣旨を述べると、ああそうなのかといった感じで、先方の態度にも変化が感じられた。先方が今度はばかに一般論めいた話をやり始め、「いいことはいいこととして行い、悪いことは悪いこととして行わない、これが法の基本でしょう」といい、「人格的なものを持っている学者と交流したい」というのである。話しを聞いていて、価値の相対主義というのが全然ないなあと感じる。それで、垣花氏も、「悪いものも見せる、本音の交流が望ましい」と言われた。それに対して、先方は、「中国は大きい。50年代と今の広州とはまったく違います。いいものでも悪いものでも我々はお見せしますよ、ご希望があれば」というのだが、ちょっととんちんかんな受け答えだと思った。共通の議論ができるようなベースを作るのはかなり困難ではないかと感じた。

懇談会の後、ホテル内で昼食会になった。飛び跳ねるエビを目の前で料理した。エビは他のときにもしばしば出た。食事中に安次富氏から、広州市法学会の財政はどうなっているのかという質問が出た。沖縄法政学会の方はほとんど会員の会費でまかなっていて、他に収入源はないので、まあ貧乏団体といえるだろう。広州市法学会の場合、例えば、前記の雑誌など一般に売られているもののようなのだが、そういったもので運営できるのですかと。陳氏の皮肉な顔つきからすると、とてもじゃないが無理のようである。この辺は、社会主義の地金が出やすい部分だと推測する。

昼食が終わったのが3時前頃だったと思うが、今度は4時から人民代表大会常務委員会を訪問するんだという。要するに市議会だと思っただが、なぜ我々が行くことになったのかよく分からず、多分表敬訪問だろうと思った。大変名誉な話らしいのだが、着いたら上のほうの階の応接間に招じ入れられる。すごく広い。そこに脇掛椅子が並んでいて、それぞれに我々の名前を書いた紙が置かれていた。ホストが謝家彦という方で、肩書きは広州市第十屆人大常務委員会副主任・広東省第八屆人民代表大會代表である。何歳なのか知らないが若々しく、にこやかである。垣花氏との間で挨拶等があった後、質問をどうぞという。表敬訪問にしては丁寧だなと思った。安次富氏が、事務局体制についてきいた。確かに、日本だと、立法は行政におんぶの部分が多く、ちゃんとした事務局がないといわれる。こちらでは、常務委員会というところが事



務局をかかえて実質的な立法作業を推進するようである。出席者の中に常務委員会の法制委員会主任と副主任2名がいて、つまりここで地方立法の準備をするのである。

私も質問した。日本で今地方分権ということが言われているのだが、中国は広いので、例えば広州にしかない問題というのがあるが、そういう時どうするのか。国のほうに従うとしても、意見が対立したときはどうなるのか。一番最後の質問にははっきりした返事がなかったと思うが、広州市で自然環境保護のための条例が作られたこと、缶のリサイクル条例と自転車置き場を決める条例とができて、町がきれいになったこと等が誇らしげに話された。質疑をしているうちに相当な時間が経った。記念撮影の後、大きなサイン帳に筆でかかされた。まいった。筆なんか持ったのは、何十年ぶりだろう。こんなのは団長だけの役目と思っていたんだが。しょうがないので、再訪してみると大発展中ですね、と書いて署名した。それから、大会議場を見学する。立派なものである。投票数を勘定する機械があった。この建物の前が孫文を記念する中山記念堂で、よく見おろせる。辛亥革命で孫文の率いる国民党が拠点にしたのが広州である。

その後、さよならかと思ったら、今度は一緒に夕食なんだそうだ。連れて行かれたところは、懐かしの広州賓館である。独立した部屋に招じ入れられる。そして食事になる。雑談中私は、両隣に座った方々に、沖縄の基地のことはこちらで知られていますかと聞いてみた。知られているそうだ。どう思いますか、ときくと、沖縄の人たちの気持ちは理解できるというのである。謝氏にも同じ質問をすると、ノーコメントで、困惑した様子である。そして、別の話に変えてしまった。こういうところは、沖縄と似ていなくもない。沖縄と同じように、広州も移民の多いところだ。広州人は世界に広がっている。聞いてみると、一番多いのがアメリカとカナダということだった。そのうちやがて、何とカラオケが始まった。日本の歌もあるのである。映像からすると相当どぎつい内容のものらしい。歌ってとしきりに言われるが、何しろ知らないのいである、歌なんか。仮に知っていたとしても、楽しく歌えるような関係とも思われない。こちら側の誰もまともに歌わず、通訳の羊さんだけが楽しそうに歌った。あちら側のおじさん2人も中国の歌を歌った。しかし、空気はちょっとしらけてしまった。何か、日本人って皆カラオケ気遣いだとでも勘違いしているのかもしれない。一応、格好をつけてお開きになった。

ホテルに戻ったら、皆ほっとしたようだ。明日で中国も終わりだ。荷物をまとめてから、散歩に出ようと思って、垣花氏の部屋に誘いに行った。垣花氏はCNNを見ていた。ちゃんと入るんですね。新城氏は毎朝NHKを見ていた。垣花氏はお土産買わないといけないという。じゃ、それを探しに行こうということで、2人で出た。

最初は、ハーリーでもらったサトウキビの汁の缶ジュースを探していた。探しながら川に沿っていった。売ってない。ベンチにアベックがずいぶんいる。いやあ、蒸し暑いからねえ、自然現象だ。ただ、座りかたがそろっていて、股を相手の股に乗せるみたいな、そんな座り方が多い。人通りは結構多い。果物屋に見かけない果物があった。殻がとにかく硬い。垣花氏はそれをいくつか買って、コンクリート壁にカーンカーンと打ちつけて割ろうとする。後ろのほうから公安の人が不審そうに見ていた。やっと割れると中からどろどろした汁が出てきた。口に入れてから、ペッと吐いて、まずい、と。私にもくれた。道路にあったごみ箱に打ちつけて殻を破ると、汁がぱっと散ってやれやれ白いワイシャツがだいなしだ。味は忘れてしまった。香港のスーパーで、山竹(每磅, Mangosteen)という名前でも売っていたものだと思う。ドライフルーツも買って食べたが、これも妙な味だった。垣花氏いわく、日本には持ってかえれません

と。結局買ったのはビスケットである。1つ10元の袋を10個。10個も買うということがおばさんなかなか分からないようで（垣花氏は、中国人にも堂々の日本語でしゃべりかける）、やっと分かったとたまげている。ちょうど10袋有って、それを全部買ったわけである。重いのに。半分私も持つ。確かに広州産には違いない。ヘビの店があった。料理して食わせる店。帰りはじめたところで、お茶でも飲みませんかという、あっ、お土産はお茶だ、と垣花氏は叫んだ。そう、そう。私もお茶にしようと思った。香港で買えばいい。別の道から帰る途中、女の子2人連れの乞食に出会った。腕にしがみつくと、何かこっちが悪いことしてるみたい。いったん通りすごしたが、別の道になると迷うんじゃないかと垣花氏がいうので戻ってきて、その時この女の子の乞食に垣花氏はビスケットを1袋進呈した。どうして女の子なんだろうかと思った。広州では乞食は結構見かける。田舎から出てきて、仕事がないのかな。川沿いに戻ってくると、ゲームセンターとか、女の立っている店とか、遊びの店は多い。ケンタッキーもあった。ホテルに帰ってくると11時半になっていた。

## 7

25日（火曜日）、いよいよ広州最後の日。荷物をまとめてから、朝食。そしてチェックアウト。ホテル代は1泊80米ドルだが、2人分はあちら持ちで、後で4人が等分になるよう清算した。

ワゴンで、まず、昨日の人代常務委員会に行く。新城氏が忘れ物をしたのでそう。中心部を朝車で走ってみて、排気ガスのひどさには辟易した。喉が痛くなって、日本に帰ってからもしばらくかすれ声になった。渋滞もひどい。

続いて広東外語外貿大学に向かう。この大学は、沖縄大学の姉妹校である。現在も、この大学からの留学生が沖縄大学で学んでいる。何かするための訪問ではなくて、たまたま広州に立ち寄ったのでご挨拶にということである。だから、琉大のお二人は関係ないのだが、できあがったプランでは一緒になっていた。それを前の晩に知ってびっくりしたが、いったん作ってしまうと社会主義国というのは融通がきかない。恐縮したのだが、お二人が快く同行してくださって救われた。この大学は広州外国語学院と広州対外貿易学院とが割合最近一緒になってできたものだが、地図を見ると、詳細図には出ていなくて、簡単なアウトラインの図を見ると、市の北方の飛行場を越えたところに外国語学院がある。多分そこだと思う。相当はずれまできた感じがした。

校長が留守なのはあらかじめ知らされていて、副校長の駱行健氏、外事処（渉外係ということか）の葉根強氏ら、それに日本語の先生等が相手をしてくれた。法学科長である私から挨拶を述べた。広州外大ってどんなところなのかと思っていたので、見学させていただき、友誼を深めたいということである。副校長から外貿大の概要について説明を受けたが、近い将来法學関係を増設したいということ初めて聞いて、いいタイミングできたと思った。また外大ということの関係上、外国人も受け入れられるようになっている。短期の語学コースもある。滞在施設もある。いいのではないか。留学する人への大学からの要望として、ちゃんと出席すること、欠席しないことを挙げられた。現にそういう例があるということである。垣花氏も興味を持ったようで、いろいろ質問していた。

その後、昼まで授業等を見学した。日本語クラスも2つ見たが、1つは先生が、沖縄国際大

学にいた人のようである。もう1つのクラスでは我々が自己紹介した。沖縄はどこにあるか分かりますかというところとちゃんと知っていた。それぞれ10人程度のクラスだった。それから、日本語の本を並べた資料室を見た。結構最近の本まで置いてある。これとは別に図書館もあるが、中は見なかった。車に乗って、留学生の宿舎と先生の宿舎を見学しに行く。留学生の宿舎のそばでは、日本から留学しにきている女性3名にもあった。先生の宿舎は家族用の空いているところを見せてもらったが、十分広く整っている。

見学の後、学内で食事をごちそうになる。円形の食卓に座って食べていると、隣の部屋から楊先生といって、沖縄大学にもいらっしゃったことのある先生がこられた。いったん席を外してから隣の用事を終え、食事の終わり頃またきてくださった。その時、中国語を勉強するといっても、広州は広東語ではありませんか、とたずねたら、いや教えるのは完璧な北京語で、広東語というのはまた別に科目としてあるんだそうである。楊先生御自身も広東出身ではなく、広東語はよく分からないそうである。

2時に今度は暨南（キナン）大学に行く予定になっているので食後お別れする。

暨南大学は広州の東の外れである。旅行後に買った、諸星清佳「ルポ中国 「解放の夢」と「開放の現実」」（晩聲社・1996年）の第4章「解放区から開放区へー広東省企業調査」で、著者が滞在したこの大学のことも書かれている。それによれば、この大学は華僑系であり、学生には華僑系・香港系・マカオ系・そして帰国華僑の子女などが多いそうである。たまたま、車が裏門のようなところから入ってしまい、学生寮の間を通り抜けて、内側から正門にたどり着くことになった。非常にたくさんの学生が住んでいるようにみえた。学部も医学部等もあり、総合大学のように、出発前に沖大の小川竹一氏からもらった資料では、大学院生416名、全日制本・専科生5,636名、通信・夜間大学生2,736名、専任教師のほうは、教授95名、助教授375名、講師363名等となっている。なお、広州にある中山大学は今回訪問しなかったが、ここは暨南大学よりもっと大きく、例えば、全日制本・専科生8,381名、教授数143名である。我々が訪ねたのは、経済法学系である。経済学院の中に経済学、商学、会計学等8つの系があり、その1つである。

入り口に、「熱烈歓迎 日本琉球沖縄大学法律系教授云々」という立て看板があり、その前で勝手に写真を撮ってから中に入った。系主任は張増強教授である。例によって、弁護士でもあるし、広州仲裁委員会の仲裁員でもある。同氏は昨年、神戸商科大学におられたということである。張教授から最初に、琉球と沖縄とはどう違うのかという質問があり、垣花氏らが応えた。経済法学系は、18人の講師がおり、そのうち10名が常勤であるとのことだった。テキストは大抵先生方が自分たちで作っており、涉外、ビジネス関係の法が中心のようである。学生はやっぱり華僑系が多いようだった。卒業生は、広東省の経済局とかへ就職するそうだ。標準語のほか、英語での授業もあるとのことだった。我々との交流として、学者の訪問、大学院の修士レベルのものの論文作成、相互単位認定等を挙げられた。しかし、例えば単位互換といっても、中国と日本とで同名の科目を履修したからといって、相互に単位認定はできないだろう。話が具体的になるとすぐにいろいろ問題が出てくる。話し合っていて感じられたのは、広州大学の場合もそうだったが、特に先方の日本法への理解が欠けていることである。先方もそれを感じたのか、例えば、我々の方で中国法講座がありますかと質問してきた。沖縄大学の場合、郭承敏教授の中国書講読という科目が法学科にあるといい、持っていた大学案内の郭氏の経歴欄を見せると、それを羊さんが訳して読み上げた。業績に毛沢東選集の翻訳があけられているが、

それをきくと失笑が起こった。先方の出席者は、張氏以外の4名は全員女性だった。その中で、陶凱元副教授が副系主任で、この人が実力者のようである。それでも若いのである。この人の名刺を見ると、やはり弁護士で律師とあるがそれに添えた英語は、Attorney at Lawではなく、Lawyerである。欧米で弁護士というときと違いがあるせいかと思った。ほかの方々もそんなに年配ではない。張氏が、この大学は若くて発展している大学なんだとおっしゃっていた。先方からの質問で、我々は市場経済主義の路線をいっていると思うが、どう思われますかと。今度はこちらが苦笑する番だった。民法専門の安次富氏が、市場経済といっても、基礎になるのは民法なのだけど、簡単な民法通則しかないような現状では、といったことを言われた。同感である。中国では商法も民法と一緒にくっつけて教えているということだった。例えば、陶副教授など、アメリカ帰りだそうで、実際聡明な方の方であるが、しかし、アメリカのおいがあんまりしない。アメリカに行って考えが変わりましたなんてことは、良くも悪くもなかったのかもしれない。日本の民法、商法はどうなっているのですということになって、ちょうど我々がお土産に持っていった小六法を見せて、商法専門の新城氏が説明したが、日本の六法を見るのは初めての方が多く、興奮した面持ちだった。こんな空気の中で、時間切れになった。

暨南大学を後にして、車で広州駅に向かう。やれやれこれで皆終わった。ほっとした空気が漂う。通訳の羊さんと李さんは、朝は何か喧嘩していて、特に羊さんはぶりぶりしていたのだが、仲直りしたようだ。

暨南大学と広州駅間は約10キロだが、40分ぐらいかかる。いやあ限界だね。那覇市とおんなじだ。実は、公式行事の中に最初地下鉄見学が予定されていたが、完工が遅れて、今年(96年)9月にできあがる予定だそうだ。

駅について、もうどこにも行かないことにして、入場場所の近くでちょっと待つ。乞食がしつこい。一度やったのに、もう一度きた乞食に垣花氏はカッとした様子である。社会主義ってのもどうなってるのかね。入場までの間、羊さんは我々一人一人に感想を聞きメモしている。恐いなあ。羊さんのおかげで楽しかったのだが、考えは頑固だ。まあ、あっち式にいうと思想が健全なんでしょう。しかし贅肉みたいなものはついてなく、知識欲とか、好奇心とかは旺盛だった。まさかそんな事言うわけにいかないし、舌足らずな批判をしても仕方がないので私はノーコメントにした。そのノーコメントという言葉の意味が、英語をやってない羊さんには分からない。

5時過ぎに入場し、パスポートにはんこを押してもらおうと待合室に入った。トイレで普段着に着替えた。いやあ、よそ行きはもうこれぐらいにしたい。売店にろくなものがないので座っていると、広州市人民対外友好協会秘書長(だと思う)が入ってきた。貴賓室にどうぞというのだ。この方とは、食事は何度も一緒だったし、身近に振る舞いを観察させてもらえたが、すごくしっかりした人だと思う。決して目立たないようにして、やるときはばっさりやるって感じだな。一番印象に残った人である。やがて、出発の時が来て、列車に乗る。乗り込んだらもう貴賓生活は終わった。やれやれ。予定通り6時15分に列車は動きはじめる。窓から見ていると、公安の車がサイレン鳴らしながら走っているのが見えた。いや、走ろうとしても先が詰まって走れないのだった。今さっきまでのことが、何か信じ難く思われた。

列車の中で、香港ドルでコーラと弁当を買って食べた。弁当はおかずとご飯が別になっている、2つでセットになっている。うまかった。

列車は8時45分頃九龍に着いた。最初、李さんがバスで行けるといってバスにこだわったので、重い荷物を持ってあちこち歩かされたが、結局タクシーで空港に行く。垣花・安次富両氏の飛行機が午後11時15分発である。両氏は香港での買い物を楽しみにしていたのだが、結局できなかった。既にチェックインが始まっていたのでそれを済ませる。両氏と別れてから、我々3人はタクシーで李さんの事務所に戻った。荷物整理をして、シャワーを浴びて12時に寝た。

## 8

26日(水曜日)、朝7時に目が覚めたが、皆さんまだ寝ているので、9時ごろまで寝直す。ちょうど雨が上がった。ガイドブックを見ると、新界の中で一番興味を感じたのが、錦田(カムティン)の吉慶園(ガツヘンユン)という、客家(ハッカ)の城壁村である。ガイドブックによれば、「16世紀末の建造で、数百人の客家がいまも生活している。城壁は6mもあり、堀なども建築当初のまま」とある。客家については毎年のように法人類学の講義で触れてきている(茂木計一郎(文)・木寺安彦(写真)「客家土楼」(季刊民族学42号(1987年)所収)等参照)。客家は、漢語の一方言である客家語を話す少数民族の1つである。少数民族とはいっても、もとは中原にいたのが、4~5世紀から南下を始め、現在は広東・福建・江西3省の省境付近に多くが住んでいる漢族系の民族で、古来の漢族の文化的特徴を保持してきているといわれる。今年も、ちょうどこれから講義で中国のことをやる予定になっていたもので、ぜひとも見ておきたかった。ツェンワンからは直行バスが出ていて所要50分。錦田よりもっと奥にある元朗(ユンロン)もいってみたい。

ところが、2人とも疲れてバテているみたいである。特に李さんは風邪気味のようだ。通訳で相当苦労したようだったから無理もない。彼は広州生まれだそうで、故郷に帰ってきたわけだが、通訳しながら先方と意見が対立することが多く、通訳の仕事忘れて論戦をするみたいなこともかなりあった。概して冷淡な反応しか得られず、それが彼の疲労を増したようである。私としては、バスに乗れば行けるので、2人の都合が悪いなら1人で行くつもりだった。しかし、2人とも一緒に行ってくれるそうなので、出発する。まず、この前と同じ銀行で私は50米ドル両替する。李さん名義でやれば手数料がただだというので、彼の名前でやってもらう。387.70香港ドルきた。ツェンワンの市場を回ってから、そば、パン、コーヒーに卵という、米中折衷のような朝食セットを食べる。17香港ドル。李さんはバスのことを人に聞いていたが、錦田行きのバスが見つからないまま、別のバスに乗った。7香港ドルぐらいだった。

ずっと海岸沿いに西に向かって行く。ベッドタウンが続く。ビル群の高さは圧倒的だ。今や、20階なら低いほうに属する。また、南方に、新空港予定地に至る橋が見える。やがて、屯門近くまで来る。人工的に作られたベッドタウンだそうで、昼間でも人通りが少なく痴漢や暴行事件が頻発しているのだそうである。

ヤオハンを通ったあたりからバスは北上しはじめ、鉄道と並ぶように走る。この鉄道は、ガイドブックには軽便鉄道だと書かれている。2~3年前、私のゼミの学生がこれを調べ、発表してくれたことがあった。屯門碼頭から元朗までだが、途中支線もあるし、屯門のあたりは環状といってもいいような形の線になっている。バスのほうがずっと速い。住宅地でないところを走っている限りは電車だが、住宅地になり、例えば赤信号になれば止まる。基本的に市電だ。それを拡張した感じである。驚いたのは、とにかく頻繁に何台も走っていて、にもかかわらず

お客は多いということですね。電車は、1両のものもつないだものもある。バスを降りて実際に乗ってみたのだが、李さんが不機嫌そうである。疲れているんでしょう。だから、私1人でいいといったんだが。そのうちバスは元朗市街に入り、終点となった。

ここで運転手さんに聞いて、別の道に行って乗り換えだと。歩いて行く。暑い。市の中心部と思われるあたりに出る。バスを待っているとき、新聞や雑誌のスタンドに「クレヨンシンちゃん」の漫画の翻訳版を見つけた。買う。30香港ドルだった。

やがて来たバスに乗る。確か5香港ドルぐらい。しばらく走ると、山の上に城壁のようなものが見え、さらに、道路沿いにも、大きな壁が現れる。これだという。しかし降りないままバスはどんどん進んで終点に至る。李さんは、もう見たからいいでしょう、というが、冗談じゃない。中を見ないと。彼は露骨にいやな顔をする。どう思われても、バスで通り過ぎただけじゃね。ココナツジュースを飲んでからタクシーで戻る。

道路ぎわに見たのが吉慶園だった。入り口で料金を取られる。といっても、1人1香港ドル。写真撮影は禁止だそうだ。外から見たら思ったより小さく、本当に数百人も人が住めるのかと疑問を持った。中に入って謎が解けた。ここは、円形ではなく、方形だが、とにかく一軒あたりの面積が狭いのである。入り口から入ってまっすぐ奥まで道があり、一番奥に祖廟がある。これがまあ言ってみればメインストリートだが、裏通り程度の狭さ。周囲をそれより狭い道が囲っている。後は碁盤の目のようにぎっちり、小さい家が建ち並んでいるのである。家は方向がそろっていて、家の前が小さな通り道になっている。家々は本当に小さい。たいてい中が見え、一番多いのが、おばあさんが1人椅子に座ってテレビを見ているという光景である。奥のほうに拝むところがある。何か見世物みたいだが、おばあさんは平気のようだ。自分に関係のないことには無関心というのが、香港の人たちの特色といわれるが（例えば、瀬川昌久「赤の他人と無色の他人」（月刊みんぱく1986年10月号所収）等参照）、それにしてもすごいもんだなあ。ちゃんと料金を取るわけだから見られてもかまいませんというわけでしょう。また、金持ちと貧乏人の差がはっきりあるようで、上等な家とみすぼらしい家が混じっている。一族なんだからそろえるなんてことはないようだ。入り口からまっすぐ入った道に何軒かお土産屋もある。客家と分かる目印は帽子だろう。中空のひらぺたいわくの外周に黒い布が垂れている。頭のとっぺんは丸出しということになる。暑くないかなあ。絵葉書も有って、買った。もっとも、ずいぶん古いものようだ。買い物等をしていたら李さんも少し機嫌がよくなった。彼がいうには、客家の人たちが話している言葉は全然分からないそうだ。入り口の右手の家にお祭り道具が置いてある。

見学が終わって、錦田から始発のバスに乗って、ツェンワンに戻る。バスは、行きとは違い、山を越えて帰ってきた。降りた場所が乗った場所と全然違う。着いてから駅のそばの店で昼食後、事務所に戻ってくる。李さんはこれが限界だったようで、寝込んでしまう。新城氏もくたびれたとあって、寝転ぶ。李さんにかばんの卸の店に連れていってもらう予定があるそうだ。私は、本屋を回らなかった。それで先に出て、新城氏とは夜空港で会うことにした。

地下鉄で行くつもりだったが、広州でもらったものが予想以上に大きい。出発前から腰をいためていたので、大事を取って、タクシーに乗り、空港にまず行った。そして、荷物を預けてしまった。身軽になってから、空港バスでチムサチュイに出る。Swindonという本屋に行く。英語の本屋さん。広州に出発する前に、香港では老人問題というか、子が親を扶養することについてどういう意識を持っているのだろうかという問題意識を持った。その線に沿った本を探

した。社会学系統の本がかなりある。その中から選んだのは、「Social Issues in Hong Kong」(Oxford University Press・1990年)である。香港大学の社会学の先生たちが書いている。その外に、出版されているのは知っていたが、日本では見かけることができなかった本等を買った。私は、本だと重くなっても全然苦にならないたちである。

この本屋に相当長くいてから、両替の追加をし、それからスーパーをのぞいた。お土産にお茶を少し買った。食べ物、日本で食べているものは大体あると思うが、例えば握り寿司を売っているのだが、これなどどうするのだろうか。何しろ暑いのですぐに腐ってしまうのではないか。私自身は、巻き寿司を買って空港までのバス内で食べたのだが。リンゴはニュージーランド産だった。品物は豊富で見てもわるだけで楽しい。

まだ早かったが、空港に戻った。空港で、きれいな袋(袋を買うのは私の趣味みたいなもの)を買ったら、それこそ、空港税を残すだけになったので、座ってメモ類の整理をした。

9時過ぎに新城氏が1人できた。李さんはダウンしたそうだ。中華航空618便で午後11時15分に発ち、12時35分頃台北に着いた。入国手続きを済ませてから出て、エアポートホテルに泊まった。部屋が、偶数番号の部屋と奇数番号の部屋にまとめて分けてある。こんな分け方ははじめてだ。

翌27日(木曜日)、朝6時15分頃、エアポートホテルからバスで空港に行く。チェックインしてから入ろうとすると、トランジットの場合も空港税がいるんだそうで、300円とか。米ドルなら12ドルというので、私は米ドルで払った。それ以上細かいのがなかったので、新城氏が日本円でいいかと聞くとだめだそうで、結局両替せざるをえなくなった。その余りで、空港内の喫茶店でコーヒーをおごってもらった。8時10分発の中華航空120便で発つ。団体が多いのか、いつもより大きな飛行機だった。10時半頃、沖縄に着いた。

(1996・7・20 脱稿)